

レイヤーモデルを用いた授業コンサルテーション支援ツールの設計指針

Design Policy of a Support Tool Using a Layers-of-Quality Model for an Instructional Consultation

齊藤 千恵子 喜多 敏博 鈴木 克明 合田 美子
Chieko SAITO Toshihiro KITA Katsuaki SUZUKI Yoshiko GODA

熊本大学大学院教授システム学専攻

Graduate School of Instructional Systems, Kumamoto University

＜あらまし＞効果的な授業コンサルテーションのあり方について、フィードバックとインストラクショナルデザインの観点から考察した。授業コンサルテーションでは、授業改善目標の設定や理論的根拠のある改善提案が求められる。異なるスキルを持った授業コンサルタントが指標を用いて授業を分析し、インストラクショナルデザインの知見をもとに改善提案ができるようになることを目指し、レイヤーモデルを活用した授業コンサルテーション支援ツールの設計指針を提案する。

＜キーワード＞ 授業コンサルテーション、レイヤーモデル、インストラクショナルデザイン

1. はじめに

高等教育機関では FD（ファカルティ・ディベロップメント）活動として様々な取り組みがなされている。その一つに授業コンサルテーションがある。授業コンサルテーションとは、教員をクライアント、ファカルティ・ディベロッパーやインストラクショナルデザイナーを授業コンサルタントとして位置づけ、授業コンサルタントが教員にヒアリングを行ったり、授業観察や授業に関するデータ分析を通して授業改善をサポートする取り組みである。文部科学省が国公私立 759 大学を対象にした調査によると、授業コンサルテーションを実施している大学はわずか 29 大学（約 4%）となっている（文部科学省，2013）。他の FD 活動と比べて実施している機関が少なく、実践事例や効果検証に関する研究が望まれる。

授業コンサルタントの経歴は様々であるため、授業分析や改善提案の質は授業コンサルタント個人のスキルに依存する。本稿では、高等教育機関における授業コンサルテーション導入の一助として、授業コンサルタントが異なるスキルを持っても、的確な授業分析結果や改善提案を得ることができる授業コンサルテーション支援ツールを設計するための指針を提案する。

2. 効果的な授業コンサルテーション

2-1. 効果的なフィードバック

授業コンサルテーションのプロセスにおいて、

授業コンサルタントは授業に関するデータを収集・整理し、クライアントに情報をフィードバックする。BRINKO (1993) は、以下のようなフィードバックが効果的であるとしている（以下、一部抜粋して齊藤が訳出）。

- ・クライアントが決めた目標に関連していること
- ・1つのスキルや1つの目標など特定の問題にフォーカスしていること
- ・複数の情報源から集めたデータであること
- ・正確なデータと反論の余地のない証拠が含まれていること

授業コンサルタントがより効果的なフィードバックをするには、授業の改善目標を決め、様々な情報源からクライアントが納得するデータを示すことが求められる。

2-2. インストラクショナルデザイン

教育活動の効果・効率・魅力を高めるための手法にインストラクショナルデザイン（ID）があり、教育活動の効果を高めるために目標と現状を明確にし、時間や労力をかけず効率的に目標を達成するよう工夫し、学習意欲が継続するよう設計する（鈴木 2005）。授業コンサルテーションにおいても、クライアントの授業改善のために ID を活用することができる。鈴木（2012）は、ファカルティ・ディベロッパーが教員を支援するにあたり、「自らの支援の理論的根拠を ID の知見に求めることが有用であろう。教員を支援する際に提案する改善策の有効性をより高めるととも

に、改善策の理論的根拠を明らかにすることで説得性を高める効果が期待できる」(p.175)としている。授業コンサルティングは、授業の現状を分析して改善提案をするだけでなく、改善目標を明確にした上で、理論的根拠のある改善提案を示すと効果的であると言える。

2-3. eラーニング質保証レイヤーモデル

教育の達成指標とそれに対応するID技法をモデル化したものにeラーニング質保証レイヤーモデルがある(鈴木2006)。達成指標を「いらつきのなさ(レベル1)」「うそのなさ(レベル0)」「わかりやすさ(レベル1)」「学びやすさ(レベル2)」「学びたさ(レベル3)」の5つのレベルで構成し、各レベルを達成するために必要なID技法を関連づけている。

レイヤーモデルはeラーニングの質保証を点検するために提案されたものだが、デザインに對面講義といったオフラインの要素も入っていることから他の教育活動にも活用できる汎用的なものであると考えられる。

3. レイヤーモデルの活用

授業コンサルティングには、目標設定と理論的根拠のある提案が必要であることから、レイヤーモデルを授業コンサルティングに活用することを提案する。その理由として、レベル分けがされているので改善目標が立てやすい、「レベル1」に焦点を当てて点検するなど効率的に授業の現状を分析することができる、達成指標にID技法が結び付いているためクライアントが決めた目標に対して理論的根拠のある提案をフィードバックすることができる、といったことがあげられる。

4. 支援ツールの設計指針

レイヤーモデルを授業コンサルティングに活用する方法として、授業コンサルタントのための支援ツールを設計・開発する。設計にあたっては、効果的な授業コンサルティングに必要な改善目標の設定、様々な情報源からのデータの提示、理論的根拠としてのID、といった要素を組み込む。レイヤーモデルを土台として、レベル、達成指標、ID技法、データ収集方法のカテゴリーで構成する。以下にカテゴリーの概要を示す。

＜レベル＞レイヤーモデルのレベルをそのま

ま使用する。

＜達成指標＞明確な目標が設定できるよう、授業コンサルティング向けに細分化した授業改善項目を作成する。クライアントが継続的に授業改善をしていけるよう、授業改善項目を達成するたびにマトリクスを塗りつぶしていくような仕組みを入れる。

＜ID技法＞細分化した授業改善項目に合わせ、ID理論の紐付けをする。

＜データ収集方法＞レイヤーモデルには無い新しいカテゴリーで、授業の現状について、クライアントが納得するデータを複数の情報源から示せるように、目標に沿ったデータ収集の方法を検討し、ツールに組み込む。

設計の指針として、授業コンサルティングの質を保つために、授業コンサルタントのスキルに依存しない支援ツールを目指す。また、IDの3つの視点である効果的・効率的・魅力的な授業コンサルティングを実現するための支援ツールを構築していく。

5. 今後の予定

今後は、支援ツールの詳細設計と開発・評価を行う。支援ツールを使用することによって、授業コンサルタントの分析方法や改善提案がどのように変化するか、その効果を明らかにしていく。さらに、支援ツールを活用した授業コンサルタント養成研修プログラムを開発していく。

参考文献

- Brinko, K. T. (1993) The Practice of Giving Feedback to Improve Teaching: What Is Effective?. *The Journal of Higher Education*, 64(5): 574-593
- 文部科学省 (2013) 大学における教育内容等の改革状況等について (平成23年度)
http://www.mext.go.jp/a_menu/koutou/daigaku/04052801/1341433.htm (参照日 2014.7.1)
- 鈴木克明 (2005) e-Learning 実践のためのインストラクショナル・デザイン. 日本教育工学会論文誌, 29(3): 197-205
- 鈴木克明 (2006) IDの視点で大学教育をデザインする鳥瞰図: eラーニングの質保証レイヤーモデルの提案. 日本教育工学会第22回講演論文集:337-338
- 鈴木克明 (2012) 大学における教育方法の改善・開発. 日本教育工学会論文誌, 36(3):171-179